The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	共同研究＜会話文と地の文に関する通時的・多角的研究とその展開＞由来
Author(s)	荒木, 浩
Citation	語文. 2008, 91, p. 47-49
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69117
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

共同研究〈会話文と地の文に関する通時的・多角的研究とその展開〉由来

荒木　浩

「閑居」の対義語に「燕居」という語がある。そのことを知ったのは大学四年、方丈記の演習の時である。先生は、文明本節用集の「三人ヲ燕居ト曰ヒ、一人ヲ閑居ト曰フ。又ノ義ニ、大勢ヲ燕居ト曰ヒ、一人ヲ閑居ト曰フ」という注記を引き、和辻哲郎によれば、三人から社会が始まる。いわばそれが燕居だ、と仰った。法学部の友人にその話をすると、政治は二人から始まるよ、という。単数、双数、複数という、言語の人称の問題とも相俟って、何だかよく分からなくなり、そのままになってしまった。

大学院博士課程に入って、同じ先生から、帰納（induction）、演繹（deduction）に並ぶ、あらたな論証方法として、abduction というものがあることを教わった。in-de-ab と接頭語を対応させ、抽象的思考を前提した、仮説投企的な論証法と理解した。チャールズ・パースの考え方だが、パースの本は、そのころ中公バックスぐらいしか簡単には読めず、参考書として、シービオク『シャーロックホームズの記号論』を勧められて把握した方法論である。実はその半年ほど前、実証に対するスペキュレーション（speculation）という論証の在り方について、示唆していただく〈場〉があった。こちらは、時枝誠記の文章を後追いして了解した（『国語学への道』）。帰納、演繹、あるいは実証、またはアブダクションかスペキュレーションか。しかし、どのような理論展開を経るにせよ、データ処理から論証が発生するときには、必ずジャンプがある、と述べる村上陽一郎の著で得心し、迷いの晴れることもあったのだった（『新しい科学論　「事実」は理論をたおせるか』）。

大学院の頃には、そうした根幹的な方法論の模索や思考、あるいは多くの迷いがある。そのとき、あくまでデータや調査を基礎に置きつつも、発想をぶつけあい、研究分野相関的に共通のテーマを議論し合うことには、大きな意味がある。一方で、きわめて現実的な話だが、さまざまな研究対象や方法論を持つ若手研究者が、同一の研究テーマを立て、共同研究を行ったり、ワーク

ショップを企画するような、企画推進能力が重要な資質として要求されている。それは昨今、予算獲得を含めて遁れ得ない、研究環境をめぐる動向・課題である。

二〇〇七年四月の教室会議で、翌年一月の国語国文学会の企画について話し合われたとき、例年通り、講演や研究発表をどうするか、ということが話題になった。ところが、今年は少し流れを変えて、新しい企画で考えたらどうか、ということになった。先述した時代状況もある。大学院生主導で、しかるべき講演者をお招きして、国語国文学会の一セクションを構成するのはどうか、などと。国語学と日本文学と、その垣根を取り払って、相互交通的に、研究交流が出来るような企画がいい、という意見も出た。たまたま私が連絡係を仰せつかって、『語文』編集委員の一人だった大学院生・黒木邦彦氏と相談したのが、この共同研究の発端である。

企画意図について、黒木氏は関心を示して快諾し、後日、加藤昌嘉氏の名前を挙げた。加藤氏の「「と」の気脈—平安和文における、発話／地／心内の境—」（『詞林』第四〇号）という論文テーマに関心があり、国語学的に問題を捉え返して、議論をしてみたい、と。五月末、加藤氏の了解を承け、対論者として、近代文学研究者の斎藤理生氏にお願いすることも決まった。

同時併行して、趣意書を作成して大学院生の有志を募り、中古班（代表黒木氏）、中・近世班（代表浜田泰彦氏）、近代班（代表鳩野恵介氏）という三つの部会を立て、共同研究チームを作って、データ収集と分析に取り組んだ。その目的は、趣意書によれば以下の如くである。

中古班：指示表現、時間表現、待遇表現といった、直示的（deictic）な表現をもとに話法分析をおこなう。また、従来の研究では見落とされていた、会話文の標示形式にも注目し、話法との間に相関関係があるかについても考察する。

中・近世班：会話文の標示形式に関する調査に基づいて、会話文の通時的変遷、ジャンル別の特性を明らかにする。なお、本調査では、濱田啓介氏「文体論試論—ト書きの周辺」（第二四四回近代語研究会春期発表大会、二〇〇七年五月、未公刊）を参照した。

近代班：会話文を卓立させる符号種について考察する。明治期は、外来の符号を柔軟に取り込み、地の文と会話文とをさらに明確に辨別せしめている。その符号種が、鉤括弧に一本化されていく過程を辿りたいと考える。

夏休み以降の集中的調査を踏まえ、各部会の中間報告を兼ねて、十二月までに三回ほど、公開研究会も行った。その他数度の打ち合わせや検討会を開催したが、諸般に渉り、助教の鈴木暁世氏、仁木夏実氏が、折に触れてアドバイスを下さったことも特記しておきたい。

二〇〇八年一月十二日の国語国文学会当日は、加藤氏、斎藤氏にそれぞれ基調報告をお願いし、院生側の代表者三人が共同研究

報告を行って議論を進めた。司会も大学院の村山識氏、川那邊惟奈氏がつとめるなど、企画総体は一貫して上記共同研究メンバーによって進められたのである。いいことばかりではない、とのご意見はむろんあり、建設的な形で、国語国文学会当日の質疑や、会の後の懇親会などで闊達に交わされた。それは、私たちの共同研究が志向する、統合止揚的な問題意識が伝わったものと理解し、感謝している。もっとも、共同研究の進め方などについて、メンバー相互においてもかなりシビアな議論が交わされたことも、一応は報告しておきたい。今後はこんなかたちでやったら、もしくは、こういう企画で行うべきである、という前向きなご意見は、是非とも具体的な提案の形として挙げていただきたい。それが次年度以降の企画として結実すれば、これ以上の悦びはない。

さて、内容のない前置きが長いほど退屈で無益なことはない。要は、以下に展開される研究成果の諸編が、目的を如何に達成し、また飛翔し得たかを、お読みいただくに如くはない。冒頭に燕居のことを述べたが、あの時以来の疑念―閑と燕（宴）、独りと多数、人称と視点の問題など―が、地の文と会話文をめぐるさまざまな考察を読んで、少し晴れた気もする。また、データと思考との相克が必然的にはらむ跳躍の様態として、五つの発表・論攷を軸とする共同研究総体の経験は、その研究推進の様態も含めて、とてもチャーミングな多様性を、私に例示してくれた。とはいえ、私自身は、いろんな意味で「大勢」ある「燕居」の人ではない。少なくとも語義上は、「燕居ノ日、徒然トシテ暮ニ向ヒ、筆ヲ染メテ情ヲ写ス」（烏丸本『徒然草』奥書）という用例が示すように、本来の漢語に即した、「閑居」に等しい「燕居」人である。「トナム語リ伝ヘタルトヤ」（『今昔物語集』）とか、「…けるとそいひったへたるとなむ」などと、「人の事のやうに」（『岷江入楚』）、一人寂かに、ようやく諸賢の論文を読み終えたところである。

（あらき・ひろし　本学大学院教授）